

BLUE GRASS



千葉大学 C&W 研究会編

まえがき

最もアメリカ的な要素は、黒人の間に主として発達してきたジャズと、白人の間に発達して来た C&W(カントリー & ウェスタン) 音楽のふたつに代表されます。そしてその C & W 音楽は「カントリー」と「マウンテン」にわけられます。最近の民謡ブームとともに人気を得るようになってきたブルーグラスはそのマウンテン音楽を代表しているものであります。ブルーグラス音楽の特長として、バンジョーやフラット・マンドリンなどの楽器を使い電気増幅せずに楽器のオリジナルサウンドを大切にすること、リフレインをデュエットで歌うこと等々の演奏スタイルの特異性をあげることができます。

しかし最も私たちをひきつけるのはブルーグラスの中にある「精神」であり、ブルーグラスのもととなったマウンテン・フォークソングにひそむアメリカの民衆の心であるのです。ブルーグラスをより深く味わうためには、私たちはその歴史を知りその心を理解することが必要です。この小冊子はその小さな助力となればひじょうに幸いです。

1963 年秋 千葉大学 C&W 研究会

目次

- I ブルーグラス音楽のふるさと
- II グッド・オールド・マウンテン・ソング
- III ビル・モンローとその子ら

I ブルーグラス音楽のふるさと ―マウンテンフォークソングの心

1 ジョン・ヘンリーの歌

コロンブスがはるばる大西洋を渡り、かのアメリカンインディアンに面会し、そして清教徒たちが安住の地を求めて以来、アメリカの歴史は「開拓」という一語で言い表わすことができます。独立後、東部の植民者たちはただひたすらに西部の開拓に没頭し、そこに不屈の精神をもって無住の荒地を拓いて運命の打開を計るフロンティアスピリットが生れたのです。

そのアメリカ開拓のシンボルは何と言っても鉄道です。開拓が進むにつれて鉄道は網の目のように敷かれついにおよそ機械文明とは縁のないアパラチアの山の奥まで鉄道工夫が入って来るようになったのです。その中には黒人の工夫もいました。彼らは見るからに屈強そうで、いつも自分の斧を自慢している樵夫のおっさんもびっくりするような大きなハンマーを手にし、そして、仕事をする時はいつもハンマーの音に合わせてこんな歌を歌うのです。

この山ん中じゃ ホイ
ハンマーはねえ ホイ
おいらのみてえに鳴るやつあ、ホイ
おいらのみてえに鳴るやつあ、ホイ

これは当時の鉄道工夫が好んで歌ったワークソング「ジョン・ヘンリー」で、誰が最初に歌ったかはわかりません。とにかくこの歌は口々に伝えられ、そしていろいろなメロディーで歌われ、新しい歌詞をつけ足したり、他の歌詞をつけたして、そしてジョン・ヘンリーの物語りができたのです。

ジョン・ヘンリーはたいそう小男で
手のひらより小さかったとさ
おふくろさんが見下ろして言うことにや
「ジョンのやつは線路工夫になるんだとよ……」

ジョン・ヘンリーの言うことにや
「おいらはテネシー生まれの快男子」
ハンマーを手にして言うことにや
「こいつはおいらの恋人さ！」

ジョン・ヘンリーにはかわいいカアちゃんがいる
その名はポリリー・アン
ジョンが病気で寝込んで
ポリリーは男のように線路仕事をしたんだとよ

ジョン・ヘンリーは黒人の鉄道工夫でしたが、英雄的人物がいつもそうであるように彼の話も親から子、子から孫へと伝えられるうちにだんだん誇張され「伝説的人物」となっていました。アメリカ北部に伝えられる樵夫のポール・バンヤンの物語りなどもそうですが、この種のトラディショナル（伝承的）な民話には常に「ほら」が含まれています。それは裏を返せばいかに彼らの仕事がつらいものであったかということを表わしています。だからこそ彼らは自分たちの仕事に誇りを持ち、自分たちの土地を愛したのでしょう。とにかくこの「ほら」こそアメリカ的ユーモアの神髄であり、フォークソングに欠くことのできない一要素でもあります。

隊長どのお早ようござんす
道がぬかるんでるんで
もうひとり らば追いをやっとなさらんかね

おいらは仕事が大好きで年中らば追いさ
らばの尻をムチで打ち
おいらの頭文字をポンと書くことだってできるのさ

ヘイ 水運びのアンちゃんよ
その仕事が嫌ならよ
そのバケツをひっくり返してしまいなよ…

これは偉大なるカントリーフォークシンガーのジミー・ロジャースが民謡をもとにして作った「ミュールスキナーブルース」という歌です。このようなワークソングは文字通りフォーク（民衆）の中に生まれ育ったものですから人々の素朴な生活感情がそのまま表われており聴く人の心をじかに捉えます。

今日のアメリカ人気質がどのようにつちかわれて来たか、そして、アメリカ開拓の精神的原動力は何であったか……などというようなことをこれらのフォークソングによって私たちは感動的に理解できるのです。民謡こそ一国の心のふるさとである。…と言っても過言ではないでしょう。

2 山人は自由なり

アメリカの東南部、州でいうとヴァージニア、ケンタッキー、テネシーにアパラチア山脈があります。このアパラチアの山々こそ民謡の宝庫であり、のちのブルーグラス音楽の発生地でもあるのです。（C & W音楽が日本では一般にウエスタン名で呼ばれているので、ウエスタンステーツの音楽と誤解されやすいのですが、本当の意味での西部音楽は少なく、いわゆるカントリーもテネシーなどの南東部の州で発達して来たものです。）

白いかしの木にコーヒーが実り
河にブランディーが流れ
丘の上の岩に金がいっぱいで
女の子は菓子より甘いんでさあ

これはアパラチアの樵夫が歌った歌ですが、いかに彼らが自分たちの土地を愛したかがわかります。山は彼らの唯一の世界だったのですから。

当時の開拓者の建物は丸太小屋で、森の中には沢山の熊やその他の野獣が棲んでいました。彼らの日々の仕事は、斧＝誰れもが幼少の頃から手にする＝をふるうことであり、木をひくことであり、水をくみ上げることであり、トウモロコシをうえることであり、魚や獣をとらえることでした。学校と呼ばれたものは少しはありましたが、せいぜい読み書きを教える

くらいのもので、もし英語以外の言葉話す人がいれば人々は彼を魔法使いと思ったでしょう。時に恐ろしい流行病が襲い肉親を失くすこともあります。嵐や雪などの自然と闘わねばならない時もあります。しかし彼らの多くはじっとそれらに耐えたくましく生活して来たのです。彼らは自分たちの生活がきびしいのかかわらず、いやきびしいからこそその生活を愛しました。他の楽な世界があったとしても彼らは決して山を離れなかったでしょう。なぜ？ それは煙草を吸う人がそれをやめないのと同じです。きびしい自然が彼らに自立性を要求し、そしてその自立性が彼らに自由を与えたのです。ウエストヴァージニア州の標語はこんなことを言っています。

Montani Semper Liberi (山の人間は常に自由である。)

3 恋……そして失恋

オールドスモーキーの山の頂で
一面雪におゝわれた山の頂で
真実の恋人を失った
愛を求めるのが遅すぎて
愛を求めるのは楽しいこと
でも別れるのはつらいこと
偽りの心を持った恋人は
盗人よりも悪いのさ
(On Top of Old Smoky)

およそ世界の歌で一番多いものと言えまづ恋の歌でしょう。この世の中に男と女が存在する限り恋愛というものは決して消えさらないでしょう。人は恋によって人生に対する喜びや希望や勇気を得ます。しかしその反面、恋は人間の醜さをも人に教えます。愛し合うことは同じに傷つけ合うことでもあります。そして恋のあるところに必ず失恋があるのです。

今日のC & W音楽には沢山の失恋の歌があります。歌は喜びや悲しみの代弁者であります。恋人に捨てられたり、自分の気持ちを打ち明けることができずひとり苦しんでいる者がギターを手にし、さびしく口ずさむ時はじめて美しい歌が生まれるのでしょうか。失恋……そのやりきれない気持ちは、まだ未開拓である自然環境がいっそう彼を孤独感へ追いやります。だからといってこういった歌が必ずしもブルームードで歌われるとは限りません。苦しい開拓とともにつちかわれてきた陽気さが奇妙にからみ合って、むしろアップテンポでさわがしいくらい元気よく歌われることの方が多いのです。元来悲しい歌であるこうした失恋の歌を山の樵夫や百姓の息子たちは全く手のつけられないほど威勢よく陽気に歌うことがしばしばでした。こんな調子のよい歌もあります。

かわいい花は咲くために造られ
かわいい星は輝くために造られ
かわいい女の子は男を愛するために造られ
かわいいマギーはおいらのものとなるために造られた……
(Little Maggie)

ところでマウンテンフォークソングに特異性を持たせる歌にトラジックソング (Tragic Songs of Life) というものがあります。文字通りトラジック (悲劇的) な内容を持った歌です。愛し合って結婚しようとするが娘の両親の反対にあってふたりとも折り重なって自殺してしまうというストーリーの「いとしのケティ」や、どうしても自分と結婚してくれると言ってくれない女を思いあまって殺してしまう告白の歌「オハイオの岸辺で」などが代表的なトラジックソングです。「丘に咲く花」、「柳の園で」、「ノックスヴィルガール」などこの種の「殺人の歌」が意外と多いことはちょっと信じがたいくらいです。

「柳の園で」や「ノックスヴィルガール」などはその歌詞の内容を紹介しがたいほどサディスティックな殺人場面の描写をしています。愛するがゆえに恋人を殺してしまう……その殺人心理はとて理解しがたいものです。しかし、逆にこうした歌から私たちは言い知れぬ孤独感と、ふと人間の心のかすめるすてばちな気持ちと、暗くのしかかる大自然からの圧迫感

にどうしてもできなくなったぎりぎりまで追いつめられた人間の姿をおぼろげにも知ることができるのです。それからもうひとつ述べておかななくてはならないことはこうした歌がひじょうに美しいメロディーを持っているということです。「病的な美しさ」とでも言うのでしょうか。とにかく美しいのです。それから長調で歌われるのもちょっと意外なことのひとつです。

4 放浪者と囚人と……

歌はすべての人が歌うものです。金持ちも貧乏人も。老人も子供も。そして世の中のふきだまりのような浮浪者たちも……。列車などを寝ぐらとした文無しの渡り職人やルンペンやホーボーとかトランプと呼びますが、彼らもまた多くの民謡を残しています。有名な「ワバッシュ・キャノンボール」もホーボーの民謡です。

ホーボーの民謡とは限らずフォークソングには「オレンジブロッサムスペシャル」や「45号列車」など列車を扱ったいわゆるトレインソングが多くあります。もっともこの2曲はブレイクダウン（フィドルやバンジョーなどの早弾きの曲）として有名ですが、とにかくトレインソングが多いことはいかに鉄道が人々を驚かせ印象づけたか。そして鉄道こそアメリカの文明開花のシンボルであったということを端的に物語っているものです。

ところでどんな社会でも無法者（アウトロー）はいるものです。開拓時代のアメリカも例外ではありません。今日の西部劇などはまさしくアウトローなしには考えられませんが……。酒、女、バクチ……。そして強盗、人殺し……。フロンティアスピリットに満ちた健全なる開拓の裏にいつも犯罪という一面が伴っているということに私たちは目をつぶるわけにはゆきません。しかし、犯罪者も歌を歌うときはひじょうに美しい心にたち戻ります。囚人が牢の中で書いたと思われる歌がいくつか伝承されていますが、そのどれもが私たちの心を打つものです。ある苦役囚はこんなことを歌っています。とてもものさびしいメロディーで……。

見たこともないような長い列車が
ジョージアラインを下って行く
6時にエンジンが通りすぎ
9時に最後尾の車が通り過ぎた
太陽が顔を見せたことのない松林の中を
ブルッとさせる冷たい風が吹く……
(In the Pines)

5 神はその子らを愛す

幸いなるかな心の貧しき者 天国はその人のものなり
幸いなるかな悲しむ者 その人は慰められん
幸いなるかな柔和なる者 その人は地を受けつがん
幸いなるかな義に飢え渴く者 その人は飽くことを得ん
幸いなるかな憐れみある者 その人は憐みを得ん
幸いなるかな心の清き者 その人は神を見ん
幸いなるかな平和ならしむる者 その人は神の子となえられん
幸いなるかな義のために責められたる者 天国はその人のものなり
(マタイ伝 5章 3～10節)

信仰の自由を求めて新大陸に渡って来た清教徒がアメリカ開拓の第一歩を踏み入れたことに象徴されるように、アメリカ人の心の柱となったものは常にキリスト教です。アメリカに限らず、西洋人にいかにキリスト教が密接したものであるかは、比較的宗教心の薄い私たち日本人には計り知れないものがあります。ギリシャ精神とキリスト教精神の二つの異質性を持った精神がうまくからみ合って西洋文化はその歴史を歩んで来たのです。

きびしい自然と真っ向から立ち向かわねばならなかったひ弱な開拓者を常に励まし勇気づけたものは「神」に他なりません。どんなに貧しい生活でも 日毎に糧を与えてくれる神に彼らは感謝しました。どんなにつらい仕事でも神が彼らを慰めました。恐ろしい病の床に伏しても彼らは神に折り、そして「天国」を夢見たのです。

開拓が進み、新しい町ができるとまずできるのが教会です。日曜になると 彼らは仕事を休み、そして教会へ行って賛美歌を歌うのです。

いつくしみ深き友なるイエスは
罪とが憂いを取り去りたもう
こころの嘆きを包まず述べて
などかは下さぬ負える重荷を

この「友なるイエス」のような賛美歌集に出ている歌ばかりでなく、彼らは自分たちで賛美歌をつくりました。このような歌をセイクレッドソング (Sacred Songs) と呼びます。マウンテンフォークソングをもとにしてできた今日のブルーグラスの半分近くがこの種のセイクレッドに占められていることは特筆すべきことです。このことだけでもいかにキリスト教が山の人たちに結びついてきたかがわかります。またセイクレッドなしにはアメリカ民謡は考えられないし、彼らの心も理解できないのです。

私は主を固く信じます
私が本当にあの岩の上に立てるために
モーゼの立ったあの岩の上に立てるために

「罪人よ、走り、そしてあなたの顔をかくしなさい
岩のところに走り、そしてあなたの顔をかくしなさい」

「主よ、私はもう見知らぬ者ではありません
砂の中にかくれるなんてまっぴらです
私はもう見知らぬ者ではないのです」

これは「モーゼの立ちし岩に」という南部の田舎の教会で今でも歌われているセイクレッドです。

セイクレッドはふつう静かな感じの曲が多いのですが、だからといって私たちが賛美歌を考える時の何となくじめじめした感じとは全く違います。また、失恋の歌が明るいメロディーを持っていたのと同じように、陽気で楽しい曲だってたくさんあります。聴いているといつのまにかうきうきしてきて思わず手拍子を打ちたくなるようなセイクレッドもあります。そして、そんな曲を聴く時、信仰の中に喜びを見出した人々の「ハレルヤ！」という叫び声が私たちの心にじかに響いてくるのです。

II グッド・オールド・マウンテンソング —プリブルーグラスの人々

1 マウンテン音楽の誕生

ヨーロッパから新大陸に渡り、アパラチアの山々に入った人々によってつちかわれてきたマウンテンフォークソングははじめから現在のようなスタイルで歌われたわけではありません。ふつう楽器なしの無伴奏が多かったようで、ギターやバンジョーの伴奏がつくのはかなり新しいことのようにです。楽器とフォークソングを結びつけたのはどうやらスクエアダンスのようです。このスクエアダンスそのものは母国イギリスに起源があるようですが、とにかくアメリカのいわば「民族舞踊」で開拓者の数少ない娯楽のひとつでした。ダンスをするにはどうしても楽器が必要でその主役はフィドル (ヴァイオリン) でした。今日のフィドルの早弾きであるハウダウンの素晴らしい伝統 (?) の源は実にスクエアダンスにあるのです。

初期の開拓時代から酒場や劇場の歌い手やピアノ弾き、それから辻音楽師などのいわゆる「プロ」音楽家は町にいることはいました。しかしそうした連中が山奥のフォークソングを歌ったとは考えられません。ではいったい誰れが最初にお山の音楽に商業性を持たせたのでしょうか？ これはちょっとむずかしい質問です。とにかく今世紀に入ってから、特に 1920 年代の終りに出現したカーターファミリーと、そしてまたグランドオールオーブリーの創設によってマウンテン音楽が世に広く知られるようになり、その後 30 年代にひとつのピークを示すことになるのです。

この 20 年代後半から 40 年代にかけての音楽をマウンテン音楽とかオールドマウンテン、

あるいは後のブルーグラスの前身という意味でプリブルーグラスと呼びます。演奏スタイルは各々のバンドによって歌い方や楽器構成に差がありましたが、一般的に言ってスクエアダンスバンドの派生体ですからフィドル中心が標準であったようです。このフィドル中心のバンドの多い中で当時としては最もモダンなスタイル（ギターとハーブ）で売り出したのがカーターファミリーです。

2 カーター家の人々

今日、多くの民謡研究家によって片田舎や山奥に埋もれていたたくさんの民謡が発掘され続々と紹介されていますが、今から 30 年も昔に南部アパラチアの山々を歩き民謡を拾い集めて世に紹介した人がいます。その人こそマウンテン音楽の旧約聖書的存在である A.P. カーターです。彼は彼の妻サラとサラの従妹で A.P. の弟エックの妻メイベルとの 3 人でトリオコーラスチーム「カーターファミリー」を作ります。編成はサラがリードシングングとオートハーブまたはギター、メイベルがハーモニーシングングとリードギター、そして A.P. がバスシングングです。彼らは有名なスカウト、ラルフ・ピアーに見出され、1927 年 8 月ケンタッキー州プリストルでの初レコーディングを皮切りに 1943 年まで 16 年間活躍を続けるのです。

彼らのレパートリーはそのほとんどが南部アパラチアの山岳地帯に伝わる民謡をもとに A.P. が加筆して作り上げた曲で、それらがそのまま今日でもマウンテン系のアーティストたちによって「カーターファミリークラシック」として愛唱されていることはいかにこのグループが偉大であったかを如実に示しています。

A.P. によって数多くの曲が残されたことの他にカーターファミリーのもうひとつの功績があります。それは彼らの演奏スタイルです。ギターとハーブによって独特の「カーターファミリーサウンド」を作り出し、そしてこのサウンドは後のマウンテンミュージックに暗示をかけたかのように強い影響力を残すのです。特にギターの使い方はカーターファミリーサウンドの神髄とも言えます。リズム楽器としての性質を失なわせないで、開放弦を多用してローコードを使いながらメロディを入れてゆくという方法は、後のレスターフラットの「G 調のコード展開」の土台となったものです。ところで、ギターは G(ト)調が一番弾きやすいのです。そのためマウンテン音楽は G 調の曲がかなりのパーセンテージを占めています。楽器が歌に影響を及ぼすということは当然のこととは言えやはり興味深いものです。

さて、カーターファミリーはその後、メイベルが抜けて、A.P. の息子ジョーと娘ジャネットが加わって 4 人のグループを作ります。このグループももちろんカーターファミリーですから、区別するために今日では前のグループを「オリジナルカーターファミリー」と呼んでいます。一方、独立したメイベルはその 3 人娘（ヘレン、ジェーン、アニタ）とグループを作り、「マザーメイベルとカーターシスターズ」という名で現在でも活躍を続けています。

カーターファミリーの活躍した時代をもう一度振り返って見ると、彼らのデビューと全く同時にジミー・ロジャースがデビューし（1927）、そして少ししてメイベルの娘たちが生まれ、そして 30 年代にマウンテンの黄金時代を迎え、そして A.P. が引退した 1943 年頃はブルーグラスがまさに典型化しようとしている時でした。そして、A.P. が他界した 1960 年はブルーグラスをして「アメリカを代表するフォークミュージック」とであると万人納得せしむるに至った年なのです。

オールドマウンテンミュージックは A.P. とともにその呼吸をし脈打った感がありますが、ビル・モンローのもたらしたブルーグラスの隆盛とともに、今日ではオリジナルカーターファミリーがその偉大さゆえに「伝説化」しつつあるのです。しかし「新聞売り子のジミー少年」や「ワイルドウッドフラワー」や「ワバシュキャノンボール」など 250 余曲の宝とともに、カーターファミリーの名声は永遠に消えさらないことでしょう。

3 プリブルーグラスの人々

カーターファミリーを含めて、1930 年代のマウンテンミュージックをプリブルーグラスと言います。マウンテンフォークソングを基盤として今日のブルーグラスへと至らせる、いわば過渡期な時代なのですが、この時代に活躍したいくつかの代表的チームを紹介しましょう。

◎ J.E. メイナース・マウンテニヤーズ (J.E.Mainer's Mountaineers)

1930 年代の中頃から活躍、メンバーは J.E. メイナー (フィドル)、ウェイド・メイナー (バンジョー)、ジークモリス (ギター、ハーモニーシンギング)、ダティ・ジョン・ラヴ (ギター) など。

リーダーである J.E がフィドルを受け持っていることでもわかるように、当時のバンドとしては典型的なものです。このグループの今日に残した影響は数多くあります。その中でも特に演奏面の功績が大きいようです。もちろんすばらしい歌をたくさんレコーディングしていますが、フィドルによるハウダウンのようなものは、かなり現在のスタイルに近いものがあり、その影響力の強さがうかがわれます。ただし、五弦バンジョーを使っていますが、コードをピッキングする程度で、今のブルーグラスのような派手な存在ではなく、レコードを聴いても聴きとれないくらいです。なお、ブルーグラスの創始者ビル・モンローも一時このバンドに籍を置いたことがあります。

◎ブルー・スカイ・ボーイズ (The Blue Sky Boys)

J.E. メイナース・マウンテニヤーズと同じく 30 年代から 40 年配に活躍したチーム。ビル (フラットマンドリン)、アール (ギター) のポリック兄弟を双頭とし、「ポリック・ブラザーズ」とも言う。マンドリンだけが唯一のソロ楽器というこれまたユニークな構成であるが、特にポリック兄弟のきれいなデュエットは名高い。

カーターファミリーが珠玉の作品を、そして J.E. メイナース・マウンテニヤーズが演奏スタイルを残したのに対し、このチームの最大の功績はその唱法であると言えます。リードシンギングをやや低めにとり、テナーによるハーモニーをつけて歌うのですが、その美しいハモリ方は何とも言葉では表現しがたい味があります。コーラス法といい節廻しといいこのチームほど後進に影響を与えたデュエットはありません。ルーヴィンブラザーズに至っては、まさに「物真似」の感がするくらいです。

◎モンローブラザーズ (Monroe Brothers)

「ブルーグラスの父」ビル・モンローが長兄チャーリー (ギター)、次兄バーチ (ベース) とブルーグラス・ボーイズを結成する前に作っていたチーム。36 年から活躍はじめ、39 年にクライド・ムーディを加えてブルーグラス・ボーイズができあがるのですが、文字通りブリブルーグラスで、ブルーグラスの土台とも言えます。

以上が主だったブリブルーグラスの人々です。30 年代はまさにマウンテンミュージックの時代でした。しかし、これらのマウンテンと平行して、ジミーロジャースの出現と、そしてまたジョージ・D・ヘイによって創設されたグランド・オール・オーブリーの出現によってカントリーミュージックが台頭して来るのです。ここで西部のカウボーイの歌が歌われ、ロイ・エイカフ等の人気歌手が登場し、ウエスタンシングなるものが現れ、そしてハंक・ウィリアムスの時代へと進んでゆくのです。カントリーミュージックは都会で育った「田舎音楽」ですが、その後、軽音楽の分野ではいつもこのカントリーが前面に出て、C & W 界は常にこのカントリーを中心としてその歴史を進めることになるのです。

Ⅲ ビル・モンローとその子ら ーすばらしきブルーグラス音楽

1 ビル・モンロー

音楽というものは常に「天才」の出現を待っているものです。ブルーグラス音楽を創り上げたビル・モンローもそうした偉大なる才人のひとりです。ビル・モンローは 1911 年 9 月 13 日、8 人兄弟の末子としてケンタッキー州ロージンに生まれました。彼の生まれたケンタッキー州は「ブルーグラスステート」というあだ名が示す通り、牧草として好適なブルーグラス (Poa 属の草) が繁茂しています。州の東部はアパラチア山岳地帯で、北のオハイオ州やインディアナ州との境にはミシシッピ河の支流であるオハイオ川が流れています。

ビルは小さい時から宗教音楽に興味を持ち、兄たちと教会で歌っていました。彼の兄たちと職業グループを結成することでもわかるように、彼の環境が職業歌手となることを決心させるのに強く作用しました。彼はアパラチアの山々を歩き、そこに伝わる価値あるお山の歌をたくさん集めます。音楽で身を立てようとした 20 才の頃には、彼のポケットには民謡で

いっぱいでした。彼は自分の声が高いのに気づき、それを利用した歌い方を考え出します。

頭のテッペンから出てくるようなフォールセット(裏声)―その独特な節廻しで歌っている時、彼の胸の中を時おり新しい音楽のアイデアがかすめるのです。しかしその新しい音楽―ブルーグラス―が世に出るまでには10年もの年月が費やされることになるのです。

ビルの職業歌手としての第一歩は前にも紹介した「モンローブラザース」でした。「モンローブラザース」が自然解消した後、クライド・ムーディと組んで「ハッピー・ゴー・ラッキー・ボーイズ」を作ります。そしてその後、クライドとビルは当時の代表的マウンテンバンドのJ.E. メイナーズ・マウンテンヤーズに加わって、マウンテンの技術を磨きます。

このようにして着々と新しいスタイルのマウンテン音楽への準備が重ねられてゆき、ついに1939年ビルとビルのふたりの兄のチャーリー、バーチ、そしてクライド、ムーディの4人で世紀のバンド「ブルーグラス・ボーイズ」を結成するに至るのです。

2 ブルーグラス・ボーイズ

ビル・モンローの故郷であるケンタッキー州の異名を借りた「ブルーグラス・ボーイズ」の誕生はそのままマウンテン音楽におけるブルーグラススタイルの誕生をも意味します。1939年、ブルーグラス・ボーイズ結成とともに、ビルは「ミュールスキナーブルース」を歌ってグランド・オール・オープリーの初舞台をふんだのです。ビルのフォールセットヴォイスのカッコ良さ、今までのマウンテンとはだいぶ趣を異にしたフラット・マンドリン(ビル)、フィドル(チャーリー)、ギター(クライド)、ベース(バーチ)の4つの楽器からかもし出されるサウンド! ビルのリズムミクなマンドリン。そして、チャーリーのうるさいくらいに鳴り続けるフィドル……。オープリーにおけるビルのデビューは大成功でした。「ミュールスキナーブルース」はビルの最初のヒットチューンとなり、そしてそのまま彼はグランド・オール・オープリーのレギュラーメンバーとなるのです。

1945年、メンバーを大刷新して、レスター・フラット(ハーモニーシンギングとギター)、アール・スクラッグス(五弦バンジョー)、チャビー・ワイズ(フィドル)を加えたとき、ブルーグラス(この名そのものは50年代になってから使われるようになった)は全く典型化するのです。特にバンジョー弾きの天才アール・スクラッグスを加えたことはそれを決定的にしました。つまり、この時、フィドル、バンジョー、フラット・マンドリン、ギター、ベースというブルーグラスの楽器編成が確立したのです。そしてまたたく間にこのブルーグラススタイルは普及し、マウンテン・イコール・ブルーグラスと言われるまでになるのです。

50年代になってブルーグラスはひとつの黄金期を迎え、そしてその後ますますファンの数を増し、60年代に入ってから全米的なブームをまき起こし、そして日本においても多くのファンを作るようになるのです。

さて、ブルーグラス・ボーイズは結成後次々とメンバーが変わり、ブルーグラス・ボーイズを出たいいわゆる「モンロー学校」の優等生たちは続々と新しいバンドを作ってゆきます。レスターとスクラッグスは言うまでもなく、ドン・レノ、マック・ワイズマン、カーター・スタンレー、ジミー・マーティン、ソニー・オズボーン等々今日活躍しているブルーグラスアーティストのほとんどが一度はビル・モンローのブルーグラス・ボーイズで同じカマの飯を食べているのです。またそこがビル・モンローをして「ブルーグラスの生き神様」と言わしめるゆえんではないでしょうか。

3 ビル・モンローの子ら

ここで現在オー線で活躍している主なブルーグラス・アーティストを紹介しましょう。

◎レスター・フラットとアール・スクラッグス(Lester Flatt & Earl Scruggs)

当代唯一の人気バンド「フォギーマウンテン・ボーイズ」の双頭。レスターは1914年、テネシー州の生まれ。アールは1924年、北カロライナ州の生まれ。

レスターは全く「すばらしい」の一言につきるほどの味のある歌を私たちに聴かせてくれます。また彼はブルーグラスのギター奏法を確立したという功績があります。

アールは天才的バンジョー弾きで、彼の「スリーフィンガースタイル(3本指奏法)」によって一躍バンジョーという楽器がメロディー楽器としての機能を持つようになり、今日ではバンジョーはブルーグラスの花形なのです。とにかくバンジョーの奏法にアールの果たした役割は計り知れないものがあり、ブルーグラス自体彼のバンジョーの出現によって成立した

と言っても言い過ぎではないのです。

1948年、ビル・モンローのブルーグラス・ボーイズからこのふたりが独立し作ったのが「フォギー・マウンテン・ボーイズ」です。53年にフォギーはグラント・オール・オープリーのレギュラーとなり、最近ではテレビ映画「じゃじゃ馬億万長者」のテーマミュージックを担当し、ブルーグラスを都会へ進出させるのに大いに貢献しました。主なヒット曲は「また逢う日まで」、「新聞売り子のジミー少年」など。

◎スタンレー・ブラザーズ (The Stanley Brothers)

カーター (リード・ヴォーカルとギター) とラルフ (テナーハーモニーとバンジョー) の兄弟グループ。

彼らの故郷であるクリンチマウンテン地方はヴァージニアでアパラチア山系に属しています。彼らの家は決して豊ではなかったのですが、音楽的には恵まれ、6人兄弟の末のふたりである彼らは、母親や叔父叔母たちから歌やバンジョーやギターを学んだのです。

彼らのヴォーカルは実に野生味にあふれ、その泥臭くまた哀愁に富んだハーモニーは全くすばらしいものです。また楽器演奏も卓越していて、ラルフのフォークスタイルを感じさせるバンジョーは5本の指に数えられるくらいです。カーターが少しの間ブルーグラスボーイズに籍を置いたのですが、事実上彼らだけでスタイルを作りあげ (ブルーグラスと紙一重ではありますが)、ケンタッキー州の異名である「ブルーグラス」の名を嫌って、「ヴァージニア音楽」と名乗り、それを誇りにしているようです。

カーターは1925年生まれ、ラルフは1927年生まれ、バンドの名前は「クリンチマウンテン・ボーイズ」。

◎ドン・レノとレッド・スマイリー (Don Reno & Red Smiley)

南カロライナ州出身のドン・レノ (1927年生) とレッド・スマイリー (1925年生) の率いる「テネシー・カットアップス」は演奏面ではブルーグラス界随一という定評があります。幼少の頃からハーブやギターなどの楽器に親しんでいたレノは、48年、ビル・モンローのブルーグラス・ボーイズにバンジョー奏者として迎えられ、翌49年に独立レッド・スマイリー (ギター) と組んで「テネシー・カットアップス」を結成しました。

コードを多用したジャズがかったレノのバンジョー、そしてそれをバックアップするように展開するスマイリーのギター・サウンド。そしてその間を駆けめぐるマジックプレー的なマック・マガハのフィドル・土の匂いをさせながら、その奥に秘むハイセンスは高く評価されています。

◎ロンサム・パイン・フィドラーズ (The Lonesome Pine Fiddlers)

1938年創設のブルーグラスバンドであるが、現在のメンバーはエズラ・クライン (ベース)、カーリー・レイ・クライン (フィドル)、メルヴィン・ゴインズ (ギター)、レイ・ゴインズ (バンジョー)。

泥臭さを適当に包んだ、近代的センスにあふれたバンドで、独特のスマートさを持ったバンドである。50年代にトップグループとなった。

◎ビル・クリフトン (Bill Clifton)

テネシー地方の、いわゆる陽気で明るい「サニー・テネシー・ムード」をモットーとした「ディキシ・マウンテン・ボーイズ」のリーダーであるビル・クリフトンは当代随一の人気男です。心にくいほどの美声と、彼の良き女房役ジョニー・クラークとのハーモニーは表現しがたい魅力があります。

ディキシ・マウンテン・ボーイズの結成は1953年ですが、59年の「ウォーキング・イン・マン・スリープ」によりブルーグラス界に確固たる位置を得、そして今やC&W専門のレーベル「スターディ社」の看板男として親しまれているのです。

メンバーはビル・クリフトン (リードシンギングとギター)、ジョニー・クラーク (ハーモニーシンギングとバンジョー)、カール・ネルソン (フィドル)、スマイリー・ホブbs (フラット・マンドリン)、ロイ・セルフ (ベース) の5人です。なお、ビルは1931年メリーランド州に生まれています。

◎ジミー・マーティン (Jimmy Martin)

これまたブルーグラスの人気男。1927年テネシーの産。49年から53年までブルーグラス・ボーイズに籍を置き、その後自分のバンドを作って現在に至っています。レパートリーはブルーグラスばかりでなく、カントリー物まで手がけているようです。

◎マック・ワイズマン (Mac Wiseman)

1925年ヴァージニア州生まれ、ハイ・テナー・ヴォイスの美声を持ち、フォギーマウンテンボーイズやブルーグラス・ボーイズにいたことがある。

◎オズボーン・ブラザーズ (The Osborne Brothers)

ボブ (フラットマンドリン)、ソニー (バンジョー) の兄弟チーム。ソニーはビル・モンローのバンドにいたことがある。また、54年から55年に、ジミー・マーティンと、56年から58年までレッド・アレンと組んでいた。

彼らは常に新しい楽器を持ち出してブルーグラスに新しい息吹を加えようと試みているグループで、「モダン・ブルーグラス」の推進者でもあります。ボブは1931年、ソニーは37年ケンタッキー州に生まれています。

◎カントリー・ジェントルメン (The Country Gentlemen)

モダン・ブルーグラスの最右翼バンドで、チャーリー・ウォーラー (ギター・リードヴォーカル) とジョン・ダッフィ (フラット・マンドリンとドブロ) がこのバンドの双頭。メンバー全員がハイ・テクニシャンで、古い民謡を実にモダンに弾きこなします。ヴォーカルはそれほどでもないのですが、楽器演奏を聴いているとモダン・ジャズを聴いているような錯覚におちいるくらいです。

創設は1957年です。

◎ジムとジェッシー (Jim & Jesse)

40年代から活躍している「ザ・ヴァージニア・ボーイズ」を率いるのはジムとジェッシーのマックレイノルズ兄弟。兄弟のきれいなデュエットが看板。なおジェッシーのフラット・マンドリンはアール・スクラッグスの「3本指スタイル」の影響を受けた近代奏法をとっています。

◎ニュー・ロスト・シティ・ランブラーズ (New Lost City Ramblers)

ワシントン出身の都会人であるマイク・シガー、ジョン・コーエン、トム・ペイリーのトリオグループ。3人とも各々自分の職業を持っているいわゆる「研究家」で、マウンテンフォークソングを聴かせてくれます。3人ともフィドルやバンジョーの楽器に精通していて、公演の時などは15台もの楽器を舞台にならべて、次々と持ちかえて演奏するとのこと。

なお、最近のアメリカの軽音楽界は完全に民謡ブームで、ニューポートで開かれたフォーク・フェスティバルの今年の聴衆は3万人以上にもなったといわれています。アメリカの民謡ブームの熱烈な推進者たちは大学生ですが、ジョーン・バエズ、ピート・シガー、オスカー・ブランド等の民謡歌手は熱狂的な人気をもって迎えられています。こうした民謡研究家兼演奏家の中でマウンテン系のオー人者がこのニュー・ロストシティランブラーズの面々なのです。

4 すばらしきブルーグラス

ブルーグラス音楽とは一口で言えば、「南部アパラチア山岳地帯に伝わる民謡を近代化した音楽」ということになります。民謡の持っている素朴さや土臭さを失なわずに、しかもある程度の近代的感覚でカッコ良く歌う…… こんなところが郷愁に飢えた現代人にアピールするのでしょうか…… とにかく最近のブルーグラスの人気は驚異的なものです。

ブルーグラスの楽器は全く単純素朴で、いっさいの電気楽器をオフ・リミットして、生の弦の音をその生命としています。また曲そのものも単純なものが多く、コードも主要3和音で用が足りるし、キー (調子) もだいたい決まっています。すべてが単純素朴であるのにな

ぜ人々にブルーグラスは愛されるのでしょうか？ それは結局、ブルーグラスの中に浸み込んでいるマウンテンフォークソングの「ハート」以外に考えられません。お山の精神丸出しの泥臭い演奏を聴く時、私たちは機械文明と同じ軸で回転して来た素朴で悲哀に満ちた民衆の生活に、目まぐるしい現代生活の中に失ないかけている自然への郷愁を呼び起こさねはしないでしょうか……。民謡こそその国の「心の故郷」なのですから……。

《千葉大学 C&W 研究会》

大塚 努
折山 敏夫
関川 靖
黒岩 公洋
安間 洋一
高田 昌一

「BLUEGRASS」 千葉大学 C&W 研究会発行 1963 年 11 月 1 日発行

